

# ゲーテの世界文学理念について

野原章雄

## Über Goethes Idee der Weltliteratur

Akio Nohara

### (1)

ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) が世界文学 (Weltliteratur) という現代では一般に使われている言葉を創造したのは1827年である。78才の時であった。この言葉がゲーテから出てくるには時代思潮とのかかわりが大きい。ゲーテ以前の17世紀は政治的には王侯貴族たちが権力の拡大を常に志向し絶対王政によって民衆の個人的な自由を束縛し抑圧してきた時代であった。当然ここでは文芸活動の自由はなかった。諸侯の宮廷が支配するところであった。しかしこれらの障壁もルネッサンス運動の高揚と自然科学の発達が大きな影響を及ぼして個人が尊重されるように次第に変わってきた。啓蒙主義時代の終りによって新しく人間精神及び理性の自立ということが起きてくる。

新しい思想の変革も文学の世界に波及してきた。国民文学 (Nationalliteratur) はこのような時代的背景を経て、一つの国にとどまらないで他の国ぐんに出てゆく。それには産業革命を基軸にした交通機関と外国との貿易の発展があげられる。ゲーテはエッカーマン (Johann Peter Eckermann, 1792-1854) に話

している。「国民文学というのは、今日ではあまり意味がない、世界文学の時代がはじまっているのだ。だから、みんながこの時代を促進させるよう努力しなければだめさ。しかし、このように外国文学を尊重する際にも、特殊なものに執着して、それを模範的なものと思いきりしてはいけないのだ。」(1827年1月31日水曜日)<sup>(1)</sup>

「文学とは成熟した自然」とゲーテが言うように国民文学は徐々に空間的に広がってゆくのである。国民文学が世界の文学へ脱皮するには物理的条件の他にゲーテがうけた内面への影響も見のがせない。少年時代の貴重な体験があった。1756年8月28日に7才のゲーテの心を揺るがした戦争が勃発した。この後の7年間は少年の心と生活に極度の緊張を与えた。宣戦の布告もなしにプロイセン王フリードリヒⅡ世 (Friedrich der Zweite, König von Preußen, 1712-1786), のちの大王 (der Große) がザクセンに侵入したのである。その後大王は自ら起草した宣言を出してこの正当性を明らかにするのであった。人びとは単なる傍観者でいるわけにはゆかなくなり、良識ある審判者になることを迫られた。そして二派に分れて争うことになる。こういう世間

の流れがゲーテの家庭内にも波及して世の中全体の軋轢の縮図が持ち込まれた。祖父はフランクフルト市の陪審官 (Schöff) として何人かの婿や娘達とオーストリア側に味方した。一方、ゲーテの父はカール 7 世 (Karl der Siebente, 1697-1745) から宮中顧問官 (Kaiserlicher Rat) に任命されたこともあって残りの家族とともにプロイセン側に味方するという始末であった。

家の中に波乱といさかいが起り、互い合いがみ合い、口をきかなくなったりという状態が続き子供のゲーテの心をひどく圧迫した。<sup>(2)</sup> 他にも小さな心をしめつけたことが生じた。この 7 年戦争 (Siebenjähriger Krieg) の始まる前年にリスボンの大地震 (das Erdbeben von Lissabon) があつた。人心の荒廃をもたらした戦争と天変地異、それにこうした身近な葛藤をのりこえるためには文学による人びとの心の宥和を作り出すことが最も大切であることをゲーテは幼くして感じてきたのである。

## (2)

人間の心の充足は経済的な交換をするだけでは達せられるものではない。Idee と知性の相互の交換が必然的に生じてくる。争いの渦中にある人々には Idee による心の宥和が役にたとう。ゲーテは考える。他国の人々や自国民の贈り物である文学はそれには最適である。人々は未来に目をむけながらも、現代と同じように争いと社会の変化に心の底でかきたてられるものがあつた。ナポレオンがあとに残したヨーロッパ社会の混乱と人々への打撃は少なからぬものがある。当時、ヨーロッパの多数の国民の間にナポレオン戦争後の復興に精神的な結びつきと宥和への願望が起り、その具体化が徐々に始まる気運が出てきた。

ゲーテが文学を媒体として、自己の目的を達成する道程を辿るには 19 世紀の 20 年代のゲーテの世界文学観もしくは Idee を追ってゆ

くことが必要である。この時期のゲーテの書簡、作品や対話にこの Idee が出てくる。ゲーテはこの Idee を中心に据えて文学活動をしていた。ナポレオン戦争に揺すぶられた後、ようやく心に静けさを取り戻した人々は外国には自分の国が持たない特性があることを知るのである。他国を知ると自国に閉じこめることは出来なくなる。交通上の年ごとに増大する速度とその便利さが作用して内面上の世界的交通つまり普遍的な世界文学が生れてくることは必定であろう。これまでのヨーロッパの文芸界はイギリスとフランスの独壇場であつた。「過去半世紀のわが国の文学をふり返ってみると、外国文学に何一つとして貢献していないことに気がつく。」とゲーテが述べるまでもなかつた。<sup>(3)</sup> ドイツ国民によく西洋にとどまらず世界の文学への参加という名誉ある役割がめぐってきたと言えよう。これまでドイツの文学を一顧だにしなかつた他国の人々はドイツに注目するようになる。理解と誤解と毀誉が入りまじりながらドイツの文学は受容と排斥の後でヨーロッパ世界に浸透してゆくのであつた。ゲーテは自国民にヨーロッパの他国の人々の文芸上の出来事を報告し、その人達がドイツ人の精神生活を吸収しようとしていることを特徴的に描くのであつた。

ゲーテはバイロン (George Gordon Noël Byron, 1788-1824) やマンゾーニ (Alessandro Manzoni, 1785-1873) のような当時ヨーロッパで名声のある詩人が自分から影響を受けていることを誇りにしている。さらにフランスのロマン主義者達は彼らの精神的な支柱として自分をみなしていることを付け加えるのであつた。世界文学という言葉は、広がり、開放性とか爆発的というような二重性を持つ。この言葉には人が閉じ込められた空間から無限の大気と光の中へ出てゆくような感じがある。しかしまたこれには不透明で曖昧性が漂うことも否定できない。ゲーテのめざした世

世界文学とは何であろうか。国民的文学の特色を出さないで、しかも国際的な普遍性を持ち、その特徴とする所は少なく、世界主義的要素を持ったものではなからうか。ゲーテは世界文学という言葉<sup>○</sup>を反復することに倦まなかった。

### (3)

ゲーテは世界に自国の文学を広めるために深遠な卓越さと愛情を持って行動したから心ない合意は出来なかった。世界文学は国民文学の持っている特殊性から普遍性を引き出してその落差をうめることに意義がある。その落差を均すために詩人や作家達は自国の人々に対するだけでなく自分自身の方法や言葉で他国の人々へも働きかける。『箴言と省察』の中でゲーテは特殊と普遍<sup>○</sup>の関係を述べている。

Was ist das Allgemeine? 普遍とは何か。  
Der einzelne Fall. 個々の事例。  
Was ist das Besondere? 特殊とは何か。  
Millionen Fälle. <sup>(4)</sup> 数百万の事例。

さらにこうも規定している。

Das Besondere unterliegt ewig dem Allgemeinen;  
das Allgemeine hat ewig sich dem Besonderen zu fügen. <sup>(5)</sup>

特殊は永遠に普遍の下にある。  
普遍は永遠に特殊に従わねばならない。

主義と充足を好んだゲーテは根源現象(Urphänomen)すなわち大多数の人々に固守される原形(Urform)は自然界では多くの変態(Metamorphose)の根幹になっていることを見ていた。人間においても同じであった。個人は人間という一つの根源現象の変態したものにすぎない。だから終局的に見

れば、この国の人達も人類という一つの原形が変形したものである。ゲーテの世界文学の理念は時間や空間の障壁をのり超えた永遠の人間の持つ気高い原形を信じることで理解されようか。ゲーテは言う。「あらゆる国民のうちで最上の詩人と作家の努力はすでに遠い昔から普遍的に人間的なものに向けられている。」個という特殊なものの中に国民性や個性によって普遍的なものが見い出せるであろう。実践的な生活上にも、同じようなものが存在する。地上の生硬なもの、粗野なもの、激しいもの、我欲の強いもの、空虚なものが交錯し混入した結果、柔和さが生じて拡大するのが自然の理である。

一つの世界文学が生れるためには批評家と作家も詩人と手を組まなければならないだろう。「詩というものは、人類の共有財産であり、そして詩はどんな国でも、いつの時代にも幾百とない人間の中に生みだされるものだ。」とゲーテはエッカーマンに語っている。(1827年1月31日水曜日)<sup>(6)</sup> 詩人と人々の間を結ぶのは批評家達に他ならない。彼等は批評活動を通して詩の精神と人々の間に共通の雰囲気<sup>○</sup>を醸し出す。人々は詩人から他国の人達の作品を読むことを教えられよう。他国の人々の特性を知らされ評価することも教えられるであろう。相互に示された関心は高まり、新鮮なものになる。

ゲーテはこれを定期的な刊行物(月刊誌)の最も特殊な使命であると見做している。ヨーロッパに有力な月刊誌が誕生したのもゲーテの世界文学理念の時期と軌を一にする。フランスには le Globe と die Revue Européenne が起り、イギリスでは the Edinburgh Review と the Foreign Review が、さらにイタリアでは das Echo が生れている。これらのグループは世界文学の構築に大きな一石を投じたことは言うまでもない。知識者達は人々の中に進んで入って文学の仲介者になった。カーライル(Thomas Carlyle,

1795-1881)はイギリス人に、ヴィクトル・クザン(Victor Cousin, 1792-1867)はフランス人にドイツ文学を啓蒙したし、ドイツのハイネ(Heinrich Heine, 1797-1856)とベルネ(Ludwig Börne, 1786-1837)はフランス精神に色濃く投影するのである。

#### (4)

詩人や作家達は個人的に旅行をし、会話をして互いに知り合い、心の充足をはかる。ヴァイマルは当時、実際にヨーロッパ精神の集合地の観があった。スタール夫人(Madame de Staël, 1766-1817)、バンジャマン・コンスタン(Benjamin Constant, 1767-1830)、ヴィクトル・クザンやデンマークのエーレンシュレーガー(Adam Gottlob Oehlen-schläger, 1779-1850)、ロシアの詩人のジューコフスキー(Vasilij Andreevich Zhukovskij, 1783-1852)、ポーランドの最大の詩人ミッキェヴィチ(Adam Mickiewicz, 1798-1855)等がゲーテを訪問した。イギリスからバイロンも来ている。しかし彼等は個人的に一度に集まることは不可能だったから、書簡による往来で文学上の一体感を確認した意義は大きい。ゲーテはスコット(Walter Scott, 1771-1832)、バイロン、マンゾーニや世界中から手紙を受け取った時、崇高な孤独のうちにも喜びと爽やかさを感じるのであった。また同時にゲーテはこの精神の領域内で孤独ではなく、一つの精神上統一されたヨーロッパがあることを想うのである。ゲーテとの手紙の交換が世界文学の存立につながり、広がりを見せる。ゲーテがトーマス・カーライルに宛てた手紙がある。ヴァイマル、1827年7月20日。

あらゆる国民のなかの最上の詩人や文学者の努力が、久しい以前から普遍的人間的なものにむけられているのは自明のことです。歴史的、神話的、寓話的、あるいは多少とも恣

意的に考案されたものなど、その種類を問わず、およそどんな特殊なものの中にも、国民性、個性のちがいをつらぬいて、かの普遍的なものがますます輝き出るのを認めることができます。(7) (○印筆者)

精神生活上、美しくかつ楽しい習慣に属するものが犠牲になって作品が生れる。バイロン、マンゾーニ、テオフィル・ゴージェ(Theophile Gautier, 1811-1872)はゲーテにすぐれた自分達の作品を献じている。バルザック(Honoré de Balzac, 1799-1850)は『人間喜劇』(Die menschliche Komödie)にゲーテ宛ての手紙を先に載せたほどである。人と人の交流による世界文学への橋渡しも重要であろうが、もっと直接的に効果のある仲介の手段があった。世界文学の広がりには不可欠なのは翻訳活動であろう。翻訳活動の普遍的重要性が『箴言と省察』の中で語られている。

外国語を翻訳するにあたっては、翻訳不能のぎりぎりの限界にまで肉迫しなければいけない。この境地に達してはじめて、他国民や他国語というものが目に見えるのだ。(8)

ゲーテは又、別の時にこう述べる。「いずれの翻訳者も普遍的に精神上の出来事の仲介者として努力し、その交換を後押しする仕事をしていると考えられる。」というものがどんなに翻訳の不十分さについて語ろうとも、技術革新が進み、高度に発達した交通事情のもとであっても、人類にとって価値のある仕事である翻訳作業は残り続けるからである。コーラン(Koran)にはこうある。「神はいずれの国民にもその国民の言葉で一人の予言者を与えた。」だからいずれの翻訳者もその国民の中では一人の予言者である。これが世

界文学の底流につながっている。

(5)

ゲーテの世界文学推進の目的意識を考えることも必要であろう。世界文学は国民相互の理解のもとに、憎悪と偏狭から人々を解放して普遍的な寛容さをいだけせなければならない。他国の人々に自国の作品を反映させ、関心と理解の深まりによって相互の国民に新鮮な感覚を与え、生産的活動を鼓舞させるものである。ゲーテも言うようにいずれの国の文学もそれが他国の人々の心に訴えるものを持ち、新鮮さを与えるものでなければ、自ら最後には情気をさそうものとなってしまおう。

ゲーテは折からヨーロッパに台頭してきたロマン主義という鏡に自分の姿を映してみる。ロマン主義者達に影響を及ぼし、彼等から批評されていることをゲーテは意識していた。変わることもなくギリシア世界への傾倒から、ゲーテは世間からは時にはロマン主義者と思われることもあった。ゲーテの思想がヨーロッパ各国のロマン主義思潮を煽動していたことも確かであったが、ゲーテはかつて言った。

Das Klassische nenne ich das Gesunde, und das Romantische das Kranke.<sup>(9)</sup>

クラシックなものは健康なもので、ロマンティックなものは病的なものです。

世界文学の理念からすれば、この言葉はすでに過去のものであろう。今のゲーテはロマン主義から文学上の滋養分を積極的に摂取するのであった。ゲーテのロマン主義的要素の濃い作品をあげてみよう。1808年の祝祭劇『パンドーラ』(Pandora)がある。断片的なものであったが既にロマン主義的色彩が出ている。1814年の『西東詩集』(Westöstlicher Divan)では東洋的な生氣と精彩に満ちた内

容に民謡が加えられた形式は古典主義を尊重した時とは趣きが異なる。また『ファウスト』第二部にロマン主義者の二重写しを登場させたことからゲーテのロマン主義への傾斜のほどがわかろうか。ゲーテはバイロンとカーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)からも刺激され、新たな文学活動へ駆りたてられる。ゲーテの生産意欲の若返りと前進はこういう所にもあった。

(6)

ゲーテが影響を少なからず受けたイギリス文学にふれないわけにはいかない。エッカーマンにゲーテは話している。「われわれ自身の文学というのも、大部分はイギリス文学が源流になっているのだ。われわれの小説も悲劇も、ゴールドスミスやフィールディングやシェークスピアをのぞいていったどこに源流があるのか? 今日でもドイツのどこに、バイロン卿やムーアやウォルター・スコットと肩を並べられるような大作家を、三人も見つけ出すことができるだろうか?」<sup>(10)</sup> (1824年12月3日金曜日)

ゲーテは真理を愛する魂とそれを究明する魂の必要性を常に念頭においていた。イギリス文学受容の根底にもこれが脈打っている。

カーライルはドイツ観念論とゲーテの古典主義を学び、『ヴィルヘルム・マイスター』(Wilhelm Meisters Lehrjahre)を1824年に英訳し発表した。他に業績はドイツ人がこれまで出来なかったほどすぐれた『シラー伝』(Leben Schillers)を1825年に出版したことである。ゲーテはこの『シラー伝』にシラーの非凡な特質が適切に表わされていることを見たのである。1827年7月20日付けのカーライル宛のゲーテの手紙がある。

あらゆる国民の文学のなかで、これを示唆し、これにむかって働いているものこ

そは、他国民がこれをわがものとしなければなりません。それぞれの国民の特性を認め、まさにそれによってその国民と交際ができるようになるために、われわれはその特性を知らなければなりません。と言うのも、一国民の特性は、その国語や貨幣の種類と同様で、交流を容易にする、いやそれどころか、これによってはじめて交流が完全に可能になるのです。(11)

ゲーテは他国の文学もその指向するところは、根本では自国のものと一致することを認識した上で書いた手紙である。これから5日後の7月25日水曜日にゲーテはエッカーマンに話している。「カーライルは、われわれドイツの作家を批評するばあいに、とくに精神的、道徳的核心を重視して、それを実際に有効なものと思倣している。その点が、彼の驚嘆に価するところだ。カーライルは、道徳的な力の持主で、そこに大きな意味がある。彼には、多くの未来がある。彼がなにを成し遂げ、どんな影響を残すかは、まったく予断を許さない。」(12) (1827年7月25日水曜日)ゲーテはすでにカーライルの将来性を見抜いているのであった。

### (7)

イギリス文学からもう一人、バイロンを挙げなくてはならない。ゲーテがエッカーマンに話したことを引用してみる。「私が独創性とよんでいるものに関するかぎり世界中のそれと比べても、彼(バイロン)に及ぶ者は一人もいまい。彼のドラマティックな葛藤をときあかしていく方法は、いつも人の意表をつき、いつも人の考え及ばないような巧妙さをみせる。」(13) (1825年2月24日木曜日)このようにゲーテはバイロンの才能を賛嘆するが否定的な考えも付け加えるのであった。「伝統的なものや愛国的なものとの袂別したことが、彼のようなすぐれた人物を破滅に導いた

ばかりでなく、革命的な精神やそれと結びついた心情のたえない動揺もまた、その才能にふさわしい発展を阻んだ。また、不断の反対と否定が、われわれの見ているように、すぐれた作品までも台なしにしている。」

イギリス国内で誤解と迫害を受け本国はもとよりヨーロッパから追放されたようなバイロンを擁護するゲーテの心情には、ただ世界文学の拡張という共通の目標があったことばかりではなくゲーテの人間性に潜む純粋なものが作用していた。ゲーテはバイロンを人間として、イギリス人として、さらに偉大な才能の人として、とらえていた。バイロンへのゲーテの最大の敬意は『ファウスト』(Faust)第二部第三幕の「オイフォーリオン(Euphorion)」にバイロンを投影させたことであろう。ギリシアがトルコから圧迫を受け、独立運動(1821年)を起こすと義勇兵として参加し、ミソロンギで死んだバイロンをゲーテは衷心から悼んだ。『合唱』に託して歌わせた。

貴い素性と大きな能力を恵まれて  
世の幸をうけるように生まれつかれたのに、  
惜しくも早くわれとわが身を見失い、  
青春の花を散らしてしまわれました。  
世の中を観る鋭い眼をそなえ、  
心の衝動に対する同情をもち、  
すぐれた婦人に対しては情熱をいだき、  
また類のない歌を作られましたのに。

(V.9915-9922) (14)

### (8)

ゲーテはイタリアでの古典主義とロマン主義の論争の調停役をはたしたことがある。これは世界文学の見地に立てば、瑣事と見えることであろう。世界文学の目標としては、共通の理解、寛容さ、主張とそれらの明確化だけでは表現不足であろう。終局とするところはもっと理想的なものにある。いずれの国民

も普遍的な人間像に寄与し、それぞれ特徴を持つものである。それぞれの特徴が十分に表出されなくては、理想の人間像は完全にならない。それに民衆の声も唱和して人類の声に高まらなければならない。一個の人間と民衆が一つになって内面的な協和音と全体性が形成され、特殊から切りはなされた世界も作り出されてゆく。

特殊と我儘の重複する生成途上の人間性は世界文学には一要素として必要であった。与えることと受けとることの相互作用は世界文学の最も理想とするものである。だからそれはゲーテの考える未完成の創造物と言えようか。世界文学の始まりの日付けをゲーテはずらして記述していることも理解できよう。世界文学構築の基礎はたいへん早い時期に着手されていた。ギリシア・ローマ時代の世界文学について言及することは、まだ時期尚早であろう。18世紀の後半から19世紀前半はまだ国と国との交易と交通は限定されており、民衆の精神的交流も少なかった。国によっては人々は同じ教育の水準になく、人々の眼は文学よりも産業の発達に向けられていた。いずれの国民の具有する特殊性も評価に値しようが、寛大さを持って相互理解し、与えるものと受け取るものを交換しあって生存する国民的理念はすぐには芽生えないが、その可能性は出てきていた。

ギリシア人は精神力で、ローマ人は武力で当時、知られた世界を支配した。精神上あるいは政治上の支配権を作り出したギリシア・ローマの両国民は被支配国の人々に対して神の恵みを背景に自分達の文化や言葉を押しつけた。こういう状況下には世界文学はすぐには生れてこない。征服された地域はギリシア・ローマ文学の拡大の場になってしまう。しかしギリシア・ローマ時代はきたるべき世界文学の時代に強固な基礎があったことは確かである。世界文学の条件には人間の原形に関するイデーがつかまとう。その原形に人間

の本質的なものが調和して加わることが望ましい。これはギリシア・ローマ時代の文化思想でもある。すなわち古代の芸術と文学の係わりのうちで生き生きと表わされた Humanitas そのものである。だから古代の文化要素はゲーテの目ざす世界文学の最も根本的な基礎になりえた。ゲーテは言う。「われわれドイツ人は、まだ未熟なのだ。なるほど、ここ一世紀のあいだにいちじるしく文明化した。けれども、わが国民のあいだに豊かな精神と高度な教養が浸透し、広く一般に行きわたるまでには、まだ二世紀三世紀はかかるだろう。そのあかつきに、はじめてギリシア人のように美を崇び、見事な歌に酔いしれて、ドイツ人が野蛮だったのは、昔の話だ、といわれるようになりたいものさ。」<sup>(15)</sup> (1827年5月3日木曜日) このゲーテの心境とは裏腹にドイツ文学は世界への道を確実に踏みしめていた。

## (9)

中世にもまだゲーテの意図する世界文学はなかった。一つの神の下に教会という絆で結びついていたヨーロッパ世界に精神的統一が確立していた。一つの世界語であるラテン語がヨーロッパを言葉の上で統一していた。同じ素材からなる『アーサー王伝説』(Artusagen)と聖譚が同じような形式で、この狭い世界のいたる所で取り上げられている。しかし『アーサー王伝説』だけの統一的なものでは、まだ世界の文学としては不足であった。まだ相変わらず国民文学の協和音は交響曲としてとまらない。しかし中世はきたるべき世界文学の二番目の基礎を築いた時代といえるのである。

キリスト教的世界理念を持たない世界文学を考えることは出来ない。愛と寛容さと礼讓が人間の原像に加わって美しい人間精神となる。人々の心に気高い連帯の意識が育まれてきた。しかし国民や国民の使命についての思考に欠落したのもあったが、ギリシア・

ローマ時代の精神とこのキリスト教精神をこの思考に結びつけたのが、ルネッサンスの大きな業績の一つである。こうした背景が第三の世界文学の基盤になるのであった。この基盤の上によろやく世界文学という建築物が姿を見せ始めてくるのであるが、まだ同時代の人々の協和音は聞えてこなかった。しかし人々は自分達の力や方法と意識に目覚める気運はあった。人々の作る人間像への寄与が次第に大きくなり、ヨーロッパを精神的に支配してゆくのである。イタリアでは民衆の中に自由と尊厳と力の理念と人間個人の権利についての自覚が芽生えてきた。

新しい思想運動の旗手としてイギリスのベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)のあとにフランスのヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)が登場してきた。経験の次に理性のヨーロッパ的支配と社会や芸術や文学における現実化が続くのである。若きゲーテはヴォルテールを内面上凌駕することに努め、ドイツの理想主義精神がヨーロッパに拡大することを願っていた。世界文学は単に存在するだけで休息する機構ではなく、生成中の有機体であると考えたい。この生成と発展は19世紀に至っても依然として継続する。

## (10)

ロシア文学はドイツにトルストイ(Tolstoj, Lev Nikolaevič Graf 1828 - 1910)とドストエフスキー(Dostoevskij, Fedor Michajlevič 1821-1881)を伴って紹介された。世界の文学の中枢部を敬虔な社会的福音で征服するものと受け取られたのである。スカンジナビアからはイブセン(Ibsen, Henrik, 1828-1906)、ビョルンソン(Bjørnson, Bjørnstjerne 1832-1910)とストリンドベリ(Strindberg, August, 1849-1912)等が世界へ続いて登場してきたが、これだけではまだゲーテの意味する世界文学としては稀薄である。

開かれたヨーロッパとそれを越えた文学の円環は少しずつ大きくなる。ヨーロッパの精神世界へ、西洋の教育から多く学び取ったアメリカの詩人ホイットマン(Walt Whitman, 1819-1892)とタゴール(Rabindranath Tagore, 1861-1941)のようなアジアからの詩人が出現するのである。ゲーテ以後、初めてドイツ精神に対抗する世界の文学が生じた観がある。これに呼応するかのようになつたドイツ精神も生じている。ゲーテが実践してきたものが、これまでのドイツ精神の中へ溶け込み、普遍的文学の形成に本質的に貢献することとなった。当時の西洋世界に影響を与えたドイツの作品はゲーテの『若きヴェルターの悩み』(1774)である。次に『ファウスト』(1. Teil 1808, 2. Teil 1832)となる。この二つの作品が発表されるまでドイツ文学は世界に知られていなかった。ドイツ文学の出現が何故こんなに遅かったのか。それを妨げていたものは何か、という疑問がわく。当時のドイツでゲーテに匹敵する作家と思われたクライスト(Heinrich von Kleist, 1777-1811)と詩人のヘルダーリン(Friedrich Hölderlin, 1770-1843)が世界文学上では名誉ある地位を与えられていなかった。これに反して取るに足らないフランスの作家がヨーロッパの知識層に持てはやされるという状況があった。

一般にドイツ語は広い意味でフランス語がなったように世界語にならなかったこともあったが、世界に知られ理解されたドイツの世界語は文学ではなくて音楽であった。ドイツの文学が世界への飛躍の遅れた理由の一つにドイツが世界における自らの立場とその使命を認識することの不足があげられる。ドイツ国民の意識のうちに統一性と集合力の欠如もある。ゲーテは言う。「ドイツ人同志が一つにまとまることを理解しないで、どうしてドイツ国民は自らのもとに一致しなければならないのか。」また、「ドイツ人は文学的意味



からは他の国民よりもはるかにすぐれている。」ともゲーテは言う。一国民の経済的物質的な力は国民の内面的統一から発展する。道徳的美学的な力もまた同じような一致点から次第に現われてくる。

### (11)

ドイツ文学には内部的な力の集積が欠けていたからそれだけ与える衝撃力は少なかった。こういう点ではフランス文学の方が恵まれていることをゲーテは指摘している。その例としてグローブ派 (le Globe) の活動をあげていた。ゲーテはエッカーマンに熱心に話している。「グローブ誌の同人たちは、みんなすばらしい人たちだし、彼らは、日ましに偉大となり重要となり、全員が、一心で貫かれているようなものだが、こうしたことはわれわれには到底わかりっこないな。ドイツではこの種の雑誌など、まったく不可能なことだろうね。われわれは、てんでんばらばらに仕事をしているから、一致団結など考えてみたこともない。猫も杓子も自分の地方や自分の町の意見ばかりか、自分自身の個性からくる意見まで持っている始末だからね。というわけで、われわれが一種の普遍的な完全な教養と云ったものを身につける日が来るのは、まだまだだ(16)いぶ先の話だよ。」(1828年10月3日金曜日) ドイツ文学の現況をゲーテは分析して発言したのである。『グローブ』誌がパリで1824年に創刊されると、まもなくゲーテは9月より定期講読者になった。この月刊誌のもとに集う人達はロマン主義的考えで行動した。ゲーテの共感を得たのは彼らが、「社交的な人たちだし陽気で、明晰だし、きわめて大胆だ。敵を非難しても、しゃれていきなところがある。」という点であった。(18)(1826年6月1日木曜日) 解放的な世界性をゲーテは評価した。『グローブ』の同人のアンペール (Jean Jacques Ampère, 1800-1864) が同誌にゲーテの戯曲の批評を載せた。これがすぐ

れていることをゲーテは知って喜んだ。そしてアンペールに讃辞を呈した。「彼は、私の人生遍歴と私の精神状態が転々と辿ってきた歩みをじつに深く深く研究し、その上、私が言わなかったことを理解する能力、いわば行間ににじみ出ている文字を見抜く能力さえ持っているといえる。」(18)(1827年5月3日木曜日) さらに続けて言う。「アンペールは、むろんじつに教養が高いから、多くのフランス人の持つ民族的な先入見や危惧や偏見からは、とっくに無縁になっている。だから、彼は、その精神よりみると、パリ市民というよりは、むしろ世界市民なのだ。要するに私の見るところでは、彼と同じ考えの人が何千人とフランスに生れる時代が到来しつつあるのだ。」ゲーテはアンペールとの好ましい関係がドイツ文学をフランス、ひいては世界へ広げる良い機会であると見なしている。しかし又、ゲーテはこの若き文学史家の才能に惹かれていることも確かであった

### (12)

徐々に大衆の中に教養ある階層の小さい円環が生じてくるが、その円環は内へ向って閉じている。それは粗野な素因を内包しながらも、その存在を確実にしなければならない宿命的な要素を含んでいた。人々は母国語を尊重しなければならない。ゲーテはこの時代を牧歌的と呼んでいた。その小さい円環は少しずつ拡大するが外国語に影響されずに、ずっと孤立することはできない。この時代を社会的あるいは市民的時代と呼んだ。ロマン主義時代とも言われた。この後に文学の普遍的時代がくる。

スタール夫人 (Staël, Anne Louise Germaine, 1766-1817) はドイツ文学に世界への道を開いた『ドイツ論』(dt.1814)の中でドイツの作家とフランスの作家の相違を述べた。ドイツの作家は社会や国民的合意や伝統や習慣との結びつきもなく、自分自身のた

めに生き、仕事をしなければならない。これが悲劇的運命を示唆するばかりか、ドイツ文学の意識上の理念と独自の価値を示している。このロマン主義の先駆者は二度ドイツを旅行している。最初が1803年10月、次が1807年の末から翌年にかけてであった。彼女はロマン派の詩人や哲学者と会って、自国の古典主義者との考えの違いをみた。スタール夫人は1804年2月2日の父宛の手紙の中でゲーテについて言及している。「ここで最も秀れた人物は言うまでもなくゲーテです。彼は唯心論者で、新しい哲学の先頭に立っている最も秀れた人物です。」

『ドイツ論』の中ではシラーを「まれなる天才をもち、完全な誠実さをもった人である。」そして「シラーはその徳とその才能によって讃えられる。良心が彼の詩藻であった。」と評した。また「ゲーテに対する讃美は、合言葉で味方を互いに知らせあうような一種のグループ意識である。」「ゲーテが、ただ一人でドイツ精神の本質的な特質を保っている。」<sup>(19)</sup>とゲーテのことを伝えていた。このような夫人のゲーテ観が世界文学へ貢献していることは言うまでもない。

ドイツ文学が世界へ拡散するには時間がかかる。この時代のドイツの文学界を代表するのはゲーテであった。ゲーテ文学の根幹と真髄は全く個人的な経験の形成と自己の告白の描写であり、又、一種の治療薬として文学を使用することにもあった。これらの方法は他国民にはなじみが薄く、すぐには理解されるものではなかった。あの『グローブ』誌も指摘している。—ゲーテの名声は私達のところにゆっくりと広まってきた。大部分彼の精神の最もすぐれた特性すなわち独創性はこの緩慢さのせいなのである。—

非常に独創的であるものは、すべて一人の特別な人間や一つの国民の性格によって強く

印象づけられる。この偉大な独創力がゲーテのつき出た功績でもある。ゲーテは極度に一人でこの特性に駆り立てられていた。他の詩人とは異なる道をゲーテは歩んだ。

### (13)

普遍的人間像の形成にドイツ文学が寄与した主な点は個性と創造性の展開である。しかしこれがかえって災いしてドイツ文学の世界への道に困難さを誘発することにもなる。内面的孤独に沈むドイツ人はこの孤独の内側から共通の拘束的な空間へすぐには出てこない。ドイツ人にとって自分達の思想や文学を普遍化することは大して重要なことではないように見受けられる。ゲーテは独白する。いかなる明白性も内面的精神には適切に表現することはできないことを深く感じていると。しかしゲーテにとっては形態的な感情の真実さよりも、言葉や態度や意向よりも、又、良質の作品よりもその理念の展開が大事なのである。

ゲーテ文学の特質はゲーテの資質によるものと、人間像に寄与する内面性の表出にあるうか。ドイツ文学が当時の他の国民に不快感を与えていたことも見のがせない。というのはそれが理想主義がめざしたものと同じであったからである。

ドイツ人のいづく世界理念には悲劇的な影がつきまとう。それは絶対的なものを現実化しようということを求めているからである。世界文学の理念は文明、和解、交易や一般的礼儀、理性や規則の根本において人々の寛容さの理念と不溶性の関係にある。この二つの理念は共時的に広まる。ドイツ精神が世界に示さなければならない本来の理念は文明に敵対する側面を持ち、文明の大海に沈みかけている価値観を救出して守ろうとするものである。ドイツ精神はまた拡大する文明の機械化に創造的かつ有機的生命を吹き込む。理性の支配には非合理的魂をもって抗し、実践的物質主義には永遠の理想で、価値の均質化に

は高貴な価値観を、懷疑論には敬虔なものを、現実主義には形而上的なものを対置させるのであった。ドイツの詩人のうちで最もドイツ的な詩を書く、ヘルダーリン(Friedrich Hölderlin, 1770-1843)はこのように詩想をめぐらした。

#### (14)

ドイツ文学の世界文学への参加を容易にしたのは、一言でいえば、精神的世界主義があげられよう。精神的世界主義は強力な翻訳活動によって、明瞭に表現されるであろう。「ドイツ国民ほど多くの翻訳をした国民はいない。」とゲーテは言っている。ドイツ語を習得する人は多様な人々が自分達の精神的な宝物を供する世界文学という市場になることになろう。ドイツ語を学ぶためにワイマルを訪れた若いイギリス人達をゲーテは快く受け入れていた。彼らはドイツ語の中に世界の文学を知ることができると思ったからであった。一つの国の文学が世界に読者を得るためには受容ばかりでなく供給することも大切であろう。ドイツ文学が歴史的にはまだ生成中の人間像に独自の必要な特徴を付け加えることが出来なければ、ドイツ文学はいつになっても世界の文学の中に定位置をしめることはできないであろう。

まずゲーテのファウストの精神があげられよう。ファウストの永遠の努力と探求の心は、ドイツ文学が世界の文学に持ち込んだ不動のものであるからである。近代の精神上ファウスト精神がヨーロッパの精神界を一時的とはいえ、風靡した現象は注目されよう。他へもゲーテの影響は及んでいる。イギリスのバイロンは言うまでもなく、フランスの作家達にも及んだ。バルザック(Balzac, Honoré de, 1799-1850), ラマルチーヌ(Lamartine, Alphonse-Marie-Louis Prat de, 1790-1869), ミュッセ(Musset, Alfred de, 1810-1857), ヴィクトル・ユゴー(Hugo, Victor Marie,

1802-1885)等は自分達を規則の束縛から解放して西洋の理性と経験の確実さの彼岸にあるところの高みと深みへ導いてくれたゲーテに心を開いたのである。フランス精神に対し対極的なものを呈示してドイツ文学は確実に世界文学の円周に迫っていた。18世紀にフランス文化がブルボン王朝のもとで熟成が終り爛熟のきざしが見られた時、ドイツ文学に時間的有利さが訪れた。ドイツ人の本質はフランス人のそれとは全く異質のものであったから、ドイツ文学はこの時代のフランス精神の氾濫のもとにあつて疲弊と倦怠の世界の文学界には新鮮に映った。ゲーテがかつて言ったようにヨーロッパ世界の蘇生はドイツ国民のような一国民だけで成しとげられるものではなく、人々の努力と争いの中から生れてくる。

ゲーテは世界にファウスト精神を吹き入れたが、その一方では逆に古典時代との結びつきでフランスから節制と法、秩序と理性によるファウスト的衝動の必然的な抑制と制限を受けたことも事実である。『タウリスのイフィゲーニエ』(Iphigénie auf Tauris, 1779)と『トルクヴァート・タッソー』(Torquato Tasso, 1789)は今日のドイツ人の感覚と意識からすれば、ラシーヌ(Jean-Baptiste Racine, 1639)とヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)の傾向にある。ゲーテは遠い東洋からの傲慢さと倨傲からファウスト精神と、さらにその硬直化から西洋的形態を守り、宗教的結束と服従を甘受したのである。

#### (15)

ゲーテの心には人々の生身の声が晩年ずっと耳から離れない。そしてその声は現代にいたるまで同じような規範として生き続けている。それと言うのもファウスト的精神は西洋文明の中へ、ロマン主義、ワーグナー(Richard Wagner, 1813-1883), ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)とともに入り、時代の飽食的文明を転回させ

たからである。これによって救いをもたらす形態と社会的美学的な結合をもたらしている。そして再びトルストイや東洋からガンジー (Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948)等とともに宗教的革新の光が西洋世界へ届くのである。20世紀になってハウプトマン (Gerhard Hauptman, 1862-1946)とトーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955)はヨーロッパで高い世評を受け、ロマン・ローラン (Romain Rolland, 1866-1944)は『トルストイの生涯』を書き、アンドレ・ジイド (André Gide, 1869-1951)はドストエフスキーについて書くなどして、次第にヨーロッパの壁は取りはらわれる状況へ進んだ。ゲーテの世界文学理念は死後、まだ未来音楽に属するものであったが、高らかな協和音となった。

今日、ゲーテの意味での世界文学について語ることは可能だけれど、それが人々の生活に与える影響までは指摘することはできない。人々はゲーテの理念から多くのことを要求すべきではない。ゲーテ自身もそれを警告していた。ゲーテの世界文学理念は戦争から残酷さを少しでも除去し、勝利から少しでも傲慢さを融和することもできなかったが、その存在の意義はあった。ゲーテはナポレオンからの解放戦争中でもフランス文化から得た知識のために、フランスを憎悪することはなかった。ロマン・ローランも大戦中ドイツの音楽と哲学から受けた自己形成のことを考えるとドイツを憎めなかった。しかし、この二人は時代のずれがあるとは言え、荒野の中で叫ぶ人であり、その声は多数の憎悪に満ちた歌声で圧倒されたことは言うまでもなかった。

世界文学が単に一つの文学現象にとどまり、世界の意向や現実にもならず、ゲーテの意味深長な言葉としてだけ存在したならば、それは一体何を真に意味するものであったのかという疑問が残ろう。ゲーテの世界文学理念は一枚の生きた木の葉にたとえることができ

る。大地から養分を吸収する木の葉は、いずれは朽ちる運命にあった。そして再び大地の養分に還元されるものであった。ゲーテの世界文学は東洋と西洋の文学が単一に同化して一つの複合物になることではない。それぞれの文学の持つ特殊性から妥当性と普遍性を創造することを意味する。ゲーテの世界文学理念はその基底では植物における根源現象と軌を一にして観念的であり、象徴的でもある。しかし、人間的営為の根底から生れた重層的な意味を含むものでもある。1982年初秋。

### 使用テキスト

Zoran Konstantinović: Weltliteratur  
(Verlag Herder Freiburg im Breisgau 1979)

Goethes Werke Bd. IV, IX, XII  
(Christian Wegner Verlag Hamburg 1967)

Fritz Strich: Goethe und die Weltliteratur  
(Francke Verlag Bern und München 1957)

Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe  
(F. A. Brockhaus Wiesbaden 1959)

Heinz Nicolai: Zeittafel zu Goethes Leben und Werk  
(Verlag C. H. Beck München 1977)

### 使用した邦訳

エッカーマン：『ゲーテとの対話』(上・中・下)、山下肇訳、岩波文庫1968  
ゲーテ全集13、15：潮出版社1980

### 注

(1)Gespräche mit Goethe, S. 174 (以下G. m. G. と略記する.)

(2)Goethes Werke Band 9 , S. 45～47を参照。(以下G. W. と略記する.)

(3)G. W. Bd. XII . S. 505の996

(4)ibid. S. 433の489

(5)ibid. S. 433の492

(6)G. m. G. のS. 173

(7)G. W. Bd. IVのS. 236

(8)G. W. Bd. XII . S. 499の946

(9)G. m. G. のS. 253

(10)G. m. G. のS. 99

(11)G. W. Bd. IV. のS. 236

(12)G. m. G. S. 485

(13)ibid. S. 112

(14)ゲーテ：ファウスト，相良守峯訳（ダヴィッド社1966）のP.297より引用.

(15)G. m. G. S. 478—479

(16)ibid. S. 216—217

(17)ibid. S. 136

(18)ibid. S. 475

(19)スタール夫人研究，城野節子著（朝日出版社1976）P. 29より引用.